

呼吸器内科に最新の診断技術 クライオバイオプシーが導入！



汎用冷凍手術ユニット「エルベ CRYO2」
提供：株式会社アムコ

窒素または炭酸ガスをプローブ内に循環させ組織を凍結（-45℃）採取する新しい技術です。

千葉県では、当院を含め4箇所の医療機関に導入されています。



呼吸器疾患の中でも、肺癌や間質性肺炎などの診断には組織検査が必要です。日常診療では、気管支鏡検査を用いて通常は生検鉗子というツマミのような道具で肺病変を採取し、病理学的に顕微鏡で診断をしています。しかし、気管支鏡用の通常生検鉗子でとれる組織の大きさは1mm程度、大きくても2mm程度です。組織が小さい分、病理診断が困難な場合があります。

今回導入されたクライオバイオプシーは、プローブ先端部が-45℃の低温となり、組織を凍結させることで組織を採取します。凍結させることで損傷が少なくより大きな組織採取が可能で、高い診断率が報告されています。診断率が高まる分、出血や気胸の合併症頻度がやや高いとされていますが、安全性に取り組む技術も向上しており（バルーン止血法）、大変有用な技術とされています。

欧米では以前から用いられており本邦でも2017年3月に保険適用となっています。

当院では、この新しい技術を導入し、地域の皆様の診断の精度向上に努めます。